

JAによる地域を元気にする素敵なお話。

JAふるさとの育む人 #40「スイカ」



育む人 佐々木 徹さん 雄物川地区 50歳

生産品目：スイカ1畝、水稲4.5畝

秋田県内生産量の4分の3を占める当JA産スイカ

夏を代表する青果物、スイカ。JA秋田ふるさと産スイカの出荷量は、県内生産量の4分の3に上り、夏スイカの主要産地として全国の市場に知られています。シャリシャリとした食感とさわやかな甘みは、全国の消費者からの高い評価を得ています。

雄物川地区の佐々木徹さんは、20年前に父の清左衛門さんからスイカ栽培を本格的に受け継ぎ、1畝に栽培しています。昨年4月、JAおものがわとの合併により、さらに大きな組織となった、当JA西瓜部会の副会長として、生産振興に尽力しています。



丁寧な栽培管理で高品質安定生産

徹さんは、両親と妻の里香子さんの4人で、約8,000個ものスイカを栽培しています。品種や植え付けの時期をずらすことで長期にわたって生産。「縞無^{しまむそ}双H」や「紅まくら」、続いて「あきた夏丸」など、7月下旬から8月中旬にかけて出荷しています。

スイカ栽培において、出荷を目前に控えた梅雨時は一番の勝負どころ。畑の排水対策や日当たりなど、病害中などを防ぐために細部に至るまで、日頃からの観察は欠かせません。徹さんは、その注意深い観察力と丁寧な栽培管理で、これまで何度となく自然の猛威を切り抜け、長期にわたって高品質なスイカを生産し続けています。



涼を求める全国のファンの元へ

同部会は生産者数386人。今年は出荷量7,500トン(前年比102%)、販売額約12億円(同)を目指し、9月上旬にかけて全国の市場に出荷しています。暑い夏、スイカの収穫はまさに重労働。しかし、繁忙期を迎えたいま、徹さんは「天塩にかけたスイカを全国の皆さんに食べていただけるのが一番のやりがい。この美味しさをもっと多くの方に届けたい」と、意気込みます。

猛暑が続く中、涼しさを求める私たちの身体に、さわやかな涼と栄養分を届けてくれるスイカ——。大きく丹精した“夏の涼”はいま、ふるさとブランドを待つ全国のファンの元へと、届けられています。

